天眼鏡

ローカルだからこそできる、楽しい

突然の総選挙となったが、今日（12月4日）の新聞を見るかぎりでは「自民党が300を越す勢い」とあり、どうも代わり映えしない結果となりそうな気配が濃厚である。ＴＰＰ反対を公約に掲げながらのＴＰＰ推進。汚染対策がほとんど機能していないにもかかわらず安全宣言しての原発再稼働推進。アベノミクスによる円安で消費生活がさらにひっ迫する一方での一部企業の史上最高益確保。こんな自民党に投票したくなるはずもないが、野党は内輪もめによる分裂を繰り返すばかりのていたらくで、信頼するには程遠く、投票したい政党はなし。そこで投票は棄権しようかとなるが、棄権するほどに自民党が圧勝するというばかげた構造。それを見透かしての早期解散。切歯扼腕するばかりだ。

お気に入りだけを集めての産業力競争会議や規制改革会議での政策決定。形骸化した国会論議と官僚の下請け化。「これしかない。選択の余地はない」では民主主義が機能するはずもない。官邸主導型で民主主義は危機にさらされているにもかかわらず、今回選挙で「信任を得た」として長期政権化し、新自由主義・グローバリズムをテコにしてのさらなる横暴が懸念せざるを得ない。

もはや政治に期待するのはほどほどにして、地域から地道に積み上げていくしかない、というのが筆者の考えである。「目には目を、歯には歯を」という競争至上主義、グローバリズム的発想にたっての規模拡大ではなく、豊富で多様な地域性と生産者と消費者の短い時間距離という日本農業ならではの特質を生かしてのコミュニティ農業。これを軸としてのローカル性を重視した農業を展開していくことが一番の生き残り策となる。コミュニティ農業の核心は関係性と循環にあり、生産者と消費者との間で生産者は「命を育む食べ物」を提供し、消費者はこれを購入することによって生産者の再生産を支えていく。このために生産者は農薬等の使用を低減するとともに生物多様性を豊富にしていくための努力を払い、消費者は生産現場に足を運び交流していく。ここでの農産物は顔が見え、生産現場の風景が浮かび、多面的機能に対する評価も含まれることになり、グローバル化するなかの単なる商品、食品としてしか見られない農産物とはまったく質を異にする。

コミュニティ農業を象徴する一つがアメリカのＣＳＡ（Community Supported Agriculture；地域で支える農業）であり、流通の一角を担うようになってきていると同時にヨーロッパでもフランス等で急速な広がりを見せている。筆者も自宅のある西東京市の仲間たち８名で、反原発＆循環型経済を目指す山口県にある祝島の生産者と一緒になって、海産物、ビワ、ビワ茶、ミカンなどの産品を毎月定期的に購入する祝島定期便をこの10月からスタートさせた。ＩＣＴの活用によってさほどの苦労もなく立ち上げることができたのであるが、まずは関係性を構築していくこと、“ご縁”を大事にし、これを生かしていく行動が必要条件であることを、身をもって実感しつつある。一人一人が可能かつ無理のない範囲でご縁を活かし実践を積み上げていくことが切実に必要な情勢にある。

畜産農家に代わって、「せねばならないこと」の実践をコントラクターに期待したい。

（農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷　栄一）